



今年度、私たち6年1組は、昨年の総合の中で興味を抱いた「耕作放棄地」を何とかしたいという思いから、学校近くでここ数年使われていない畑の持ち主である千野さんにその土地をお借りして、活動をしていくことを決めました。ここでは、その活動について紹介します。

★『協力し合えばこんなに大変なことをやり遂げられることが何より嬉しい』★

「耕作放棄地利活用プロジェクト」が始まりました。きっかけは、「去年、中途半端で終わっちゃった気がするし…、あそこで何かやってみたい」そんな子どもたちの思いでした。昨年度の総合学習「私のお米になっていく 米作りへの挑戦」の中で出会い、「わたしにとって耕作放棄地とは…」と考えてきたことが、今年の活動につながっていきこうとしていることにうれしさを感じています。

しかし、「利活用しよう」と決めたことで出会い直した学校近くの畑の草の様子は、去年とは違って見えました。背丈よりも高く茂るセイタカアワダチソウや、足元一面に力強く生える青々とした草は、まるで私たちの活動を拒んでいるかのようでした。後で子どもたちと計測して分かったのですが、この畑は、25mプールが2つすっぽり入るくらいの広さがありました。「本当にできるのかな…」という不安な気持ちを抱えながらも、子どもたちは「すごくやりがいがありそう」という前向きな気持ちでこの畑の草刈りに挑んでいきました。そんな姿に私も支えられながら一緒に草刈りを頑張りました。

そして、子どもたちは草刈りを終えるまでに、実に10回も畑に通いました。草刈りが終わった時の畑は、もう景色を遮るセイタカアワダチソウも、歩くのを拒む雑草もありませんでした。子どもたちと、すっかりきれいになった畑を見た後で、教室でこれまでの活動について振り返りをしました。



- ・きれいになった耕作放棄地を見たときに、達成感と嬉しさが溢れました。(Rさん)
- ・こんなに、いっぱいあった草が、みんなと力を合わせてやると、こんなにすぐなくなって、しかも、やる気を無くして、たくさん、「もうだめだな」と思ったときもあったけど、みんなでできたので、すごいなと思いました。(Hさん)
- ・雑草を刈ったときは、「もうめんどくさい、やる気でないな〜。」って思ってしまったときが何回かありました。なので、今、「あ〜、なんで、あのとき全力で、周りの人みたいにできなかったんだろう？」って思っています。でも、一緒に刈っていた友達と、結構、草刈ったなって思いました。最初は、遊んでるときもあったのに、めっちゃくちゃ頑張ったのでみんな、すごいなっておもいました。これからの、うね作りでは、後悔することがないように頑張りたいです。(Kさん)
- ・私は、草刈りを終えられてよかったです。そして、今日の畑を見て「変わったな」と思いました。最初は草だらけで畑の反対側から反対側まで行くのに通りづらい感じだったのが、今はもう何もなくて、反対側まで行きやすい状況になっていました。それが不思議です。私達6年1組だけであの耕作放棄地を綺麗にできたことに「すごいな。不思議だな」と思いました。そして、6年1組みんなが力を合わせれば、協力し合えば、こんなに大きな大変なことをやり遂げられることが、なにより嬉しいし、改めて「6年1組はすごいな」と思いました。(Iさん)

10日間に及ぶ草刈りを通して、子どもたちの心に残ったことは、「仲間がいることのよさ」だったのではないのでしょうか。くじけそうなとき、あきらめなくなる時に、頑張っている友達の姿を見て、自分も頑張りたいと思ったあの瞬間、絶対に一人じゃできないことも、みんなの力が合わさるとこんなにも広い畑の草刈りだってできたんだと感じたあの瞬間は、この畑と、自分自身と向き合ってきた子どもたちの大きな自信となり、これからのわたしを支えてくれる宝物になっていくのではないかと感じています。

今子どもたちと耕した畑で畝づくりをしています。目標は種うえを来週の木曜日に行くことです。畝づくりを始めてみたら、こちらやはり大変な作業でした。しかし子どもたちは「みんなで協力すればできそう」と今日も頑張っています。



## ★子どもたちの丁寧さ★

6月5日、わたしたちの畑に、綿花の種まきをしました。途中、ふとHさんとRさんを見ると、2人はマルチに空いた穴の数を数えていました。そのうち数え終わったらしく、私に、「先生、1820個もあるよ」と教えてくれました。私は、その途方もない数を聞いて思わず焦ってしまいました。時期的にも、できるだけ早く種まきをしなければ、と考えていたからです。焦る気持ちは、自分の声かけにも表れてきていました。「頑張れー」「あと〇〇分だよ」「時間終わっちゃうよ」そんな言葉をかけていると、隣にいた用務員の中村先生が、優しく話しかけてくれました。「種まきは丁寧にすれば、丁寧に育っていくよ」その言葉を聞いて、私は、はっと、焦っている自分がいることに気づかされました。そして、子どもたちの様子を改めて見ると、子どもたちの作業の中にある、「丁寧さ」が見えてくるのでした。

Rさんは、マルチに空いた穴に土を入れていました。バケツに土を入れシャベルを使って、一つ一つの穴に土がこぼれないように入れていました。種まき作業の前に教室で伝えた「マルチの穴と土の間が空きすぎていると、マルチが動いたときに芽に当たってうまく育たない」ということが、Rさんの心に残っていたのでしょうか。「ありがとうR君」と伝えると、とてもうれしそうに作業を続けていました。



T君とS君は、種をまき終わった後で、種をまいた畝に向かって手を合わせていました。よく見ると、畝の端のところに祠のようなものが作られていました。「綿花がよく育ちますように」と願いを込めて手を合わせる姿に、私は2人にとっての丁寧さを見ることができました。

Aさんは、授業時間が終わった後も、ずっと、一人で畝のそばで何か作業をしていました。私が近寄って話しかけてみると、「種に土がかぶさってないし、下の方にあたりすぎるから直してるの」と教えてくれました。そして、一つの穴をじっくりと見つめ、種が見えればそこに土をかぶせていくのでした。Aさんがいくつかの種の植え方を直している様子を見ながら、ふと振り返って、Aさんが作業してきた畝に目線を移すと、いくつかのマルチの穴から小さな棒が出ているのが見えました。「この棒って何かな」と聞いてみると、Aさんは、「ここは土が足りないところ」と教えてくれました。恐らく、休み時間に一人で作業している中で、「このままだと間に合わない」と考えながらも、「でも何とかしたい」と思う気持ちから、Aさんは棒を立てて目印にしたのではないのでしょうか。それでもできる限り土を入れていくAさん。「このままじゃ発芽できないから」とつぶやきながら作業する姿に、Aさんの、綿花の種に寄せる思いとAさんの丁寧さを見ることができました。



種まきを終え、Aさんは次のように振り返りを書きました。

水やりも直すことも途中までしか出来なかったけど、これまでの中で一番頑張れたと思います。

Aさんの作業の様子を間近で見ることができた私は、このAさんの一文がとても心に残りました。途中までしかできなかったことは、決して中途半端だったということではなく、Aさんが精いっぱいだったからこそ、書くことができた一文なのだと思います。「これまでの中で一番頑張れた」と自分自身を認めているところもとても素敵だと思います。



種まきの中で見ることができた、子どもたちの丁寧さ。そうやってまたこれからの生活の中でも、子どもの姿を感じていきたいです。

## ★今日の綿花に会いに行こう★

綿花の種を植えてから、20日が過ぎると。子どもたちが丁寧に植えた多くの綿花の種は発芽し、すくすくと成長してきました。子どもたちと一緒に畑に行って綿花の成長を見るのがとてもうれしいです。しかしその一方で、向き合わなければならない問題も出てきました。

まず、「虫による被害」です。最初にS君が葉っぱが食べられていることに気づき、中村先生に相談してみると「ヨトウムシ」に食べられていることが分かりました。中村先生からは「土を掘ってヨトウムシを駆除する」と教えてもらいました。翌日「ヨトウムシから綿花を守ろう」と畑に出かけようとしたとき、雨が降っていて畑に行くことはできませんでした。「今日は仕方ないからまた明日にしよう」と思った私は、子どもたちに、



図書館の吾妻先生から借りてきた綿花の絵本を紹介し、綿花についての知りたいことを調べる時間にしよう子どもたちに伝えました。最初は、雨なら仕方ないかといった感じで本を読んでいるようでしたが、そのうちMさんが、「先生、ヨトウムシって『夜盗虫』って書くんだった、だから夜中に食べてるんだ」と伝えてくれました。その声がきっかけだったのか、そもそも最初からだったのかはわかりませんが、多くの子どもたちはヨトウムシについて調べ始めているようでした。画像を見て「何これ、気持ち悪い」という声や、「カフェインが苦手らしいよ。コーヒーかければいいらしい。」「米ぬか好きだから、平成農園さんに行ってもらって来ればいいじゃん」という声があちこちから聞こえてきました。私も子どもたちの声を拾いながら黒板にチョークを走らせていました。気が付けば、黒板はヨトウムシ対策についていっぱいになっていました。



翌日、霧吹きに入れたコーヒーを綿花にかけたり、おうちからもってきたペットボトルに平成農園さんに行ってもらって来た米ぬかを入れたりしてヨトウムシ対策をしました。

この日、子どもたちにとって、「私たちの綿花を食べてしまうヨトウムシをどうすればよいか」ということが、考えずにはいられない問いとなっていました。子どもたちの姿を見て、「明日行けばいい」という私の考えの甘さに気づかせてもらいました。



また、「上手く発芽できなかった綿花」も子どもたちにとって考えずにはいられない問題になってきました。早く植えたいなど考える子どもたちがいる一方で、今どれくらい綿花が発芽しているのか視覚的に捉えてみたいと考えた私は、調査用紙を子どもたちに提案してみました。するとT君たちが「俺が調査するよ」と名乗り出してくれました。T君たちは「調査団だ!」と言いながら畝に生えている綿花を一つ一つ調査してくれました。T君たちが調査してくれた図を見ると、畝によっては半分以上も発芽していないところもあることが分かりました。活動を終えたT君は次のように振り返りを書きました。

綿花の芽を見に行きました。僕は、調査団として調査をしていました。そしたら意外にも苗が生えていてびっくりしました。みんなおこめみたいに、お母さんみたいに育てていて一人ひとり思いがあるんだなと思いました。(Tさんの振り返りより)

Tさんが感じていたのは、発芽している綿花の種に寄せる思いでした。そして私は、Tさんの振り返りから、昨年度のお米の活動と結び付けながら、大切に育てているわたし、そして友だちの綿花へのかかわりに思いを寄せている姿を感じ取ることが出来ました。

子どもたちは毎日、綿花と「わたしの思い」と共に関わりを続けています。